息子の魂はネパールに

奔走の邦人医師、無念の死

(3/12)

遺志継ぎ母がAMDAに寄付

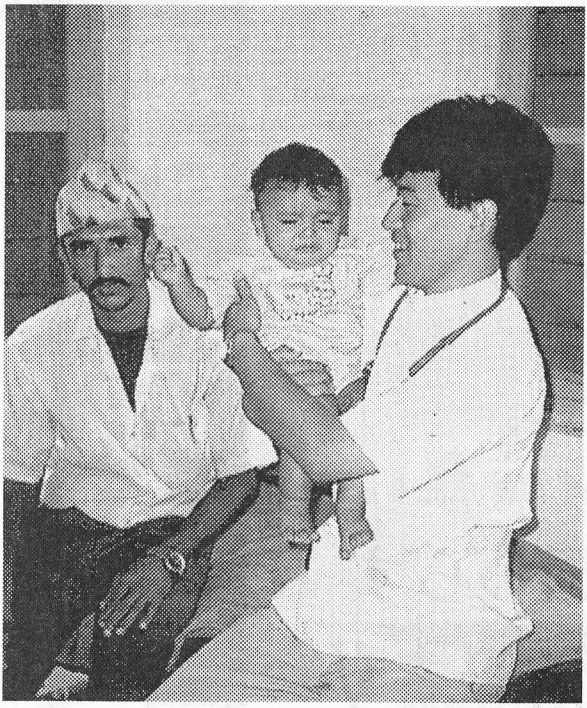
「魂はネパールに飛んでいると思います」。ネパール・ブトワル市で動き出した子ども病院の計画当初からかかわった小児科医、篠原明さん＝大阪市東成区＝が、昨年11月に31歳の若さで急死。その遺志を受け、遺族がこのほど、生前の貯金や葬儀の香典など計300万円をAMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）に寄付した。亡くなる直前まで「入院なんかしていられない」と、現地での医療指導を熱望していた病院は、今春にも着工される。寄付金は病院の看護婦などの育成基金として活用され、院内のモニュメントには、篠原さんの名前が刻まれる。母浪枝さん(59)は「夢が実現するんですね」と、目頭を押さえた。【蓮見　新也】

今春着工の子ども病院

子ども病院は、神戸大医学部に留学中のAMDAネパール代表、ラメシュワル・ポカレル医師(39)が構想。その夢をかなえるため、篠原さんが1994年から基本計画を作成し、これに応える形で、昨年7月からの本紙キャンペーン「明日を生きたい――ヒマラヤのふもとから」が始まった。この後、読者からの善意が続々と寄せられ、昨年末、外来と病棟など基本的な機能を備えた第1期病院工事に必要な資金が集まった。

篠原さんは高校時代から途上国でのボランティア医療に関心を持ち、「日本では少子化が進んでいるが、世界には授かった命がすぐ失われるような悲惨なケースが多い。その救援は難しいが、やりがいもある」と小児科医を志した。関西医大に在学中に途上国で医療救援を行うAMDAの活動を知り、卒業後の92年に会員に。アフリカやアジアの現状を見て歩いた。93年4月から3カ月間、ネパール西南部のダマック市のAMDAが開設した病院で、ブータン難民のために医療奉仕を行った。

「動けるうちは途上国で医療活動」。篠原さんの口癖だったが、94年秋にリンパ腫で入院。病と闘いながら子ども病院の計画案を練り続けた。しかし、昨年8月に3回目の入院。11月初めには一時退院するなど元気な様子だったが、同月21日未明、亡くなった。浪枝さんは「地球儀を持ち出して私に説明してくれたり、亡くなる4、5時間前まで冗談を言うなど、つらさを決して表に出さない明るい子でした」と無念そう。



ブータン難民の治療をする篠原明さん＝ネパール・ダマック市のAMDA病院で1993年

母の浪枝さん

浪枝さんによると、篠原さんの活動に感銘を受けたいとこの双子兄弟が今春、「後を継ぎたい」と医学部を目指して大学受験に臨んでいるという。篠原さんの死と遺志に、ポカレル医師は「2人で病院をやろうと言ってきたのに残念。篠原さんなしではここまでこられませんでした」と感謝している。

救援金にご協力を

ネパールの子どもたちに目に見える援助を実施するため、今回のキャンペーンは現地で進められている子ども病院建設計画に協力しています。救援金は左記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。

〒530―51　大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係（郵便振替・00970―9―12891）